ＣＦＴニュース＆息抜き（８月）

全日本コーヒー公正取引協議会（コーヒー公取協）に寄せられた問い合わせなどを、トピック形式で毎月リリースします。参考になれば幸いです。

１．２０２４年７月の気になる問合せ

（１）　「レギュラーコーヒー（ガセット袋入り）」の袋の容積に対しての適正な内容物の量について、基準や指針等、法や条例等で決められているか？

　通常コーヒーが 200ｇくらい入る袋に半分の 100ｇで製品化して、中身がスカスカであるような事例で、「空間率が何%以上では計量法や条例違反にあたる」など、具体的に基準があればご教授頂きたい。

⇒　200ｇ入るガセット袋にレギュラーコーヒーを 100ｇ入れて販売してもこれを違反とする法律や条例はないのでないでしょうか。

　計量法はコーヒーを特定商品と定め、量目公差の遵守を求めています。量目公差は容器包装の大小と内容量には関係ありません。

　近年、事業者の中には包材の節約などのため、複数の製品に汎用性を求め、200ｇ入りと 100ｇ入りを共通包材とすることもあると考えます。

　空間率については初耳です。もし指摘する法令や条例があればご教示ください。

（２）　会員社のコーヒー製品の産地表示が「又は」としたものを見たが、この表示はコーヒー公取協で認めているのか。

　加えて、コーヒー公取協非会員社のインスタントコーヒー製品（同一社）のコーヒー豆産地表示を、「原材料名：コーヒー豆（輸入）」とした製品と、「原材料名：コーヒー豆（生豆生産国名：〇〇、△△、その他）」とあるが、産地表示がアバウトすぎるのでないか。参考までに言うと、前者は製品名レギュラーソリュブルコーヒー、後者は製品名インスタントコーヒーと記載してあった。

⇒　当該会員社は食品表示基準で「又は」表示が認められているため、「又は」表示を行ったものである。コーヒー公取協は団体設立の経緯が「コーヒー生豆生産国名」を消費者に伝える目的で設立された経緯があり、同社に趣旨を説明し、当該社は既存包材が無くなり次第、「又は」表示は止めるとしているので、ご理解いただきたい。

N社のインスタントコーヒー製品のことと思慮するが、非会員社ですので当方は何もできません。

とはいえ、一般消費者から見ればいずれもインスタントコーヒー製品で製品名の違いで原材料が「輸入」であったり、「生豆生産国名：〇〇、△△、その他」というのは理解しがたいと考えます。因みに、N社が日本においてレギュラーソリュブルコーヒー名称で販売する製品は、EU諸国や米国では「インスタントコーヒー」名称で販売しています。

２．コーヒーを巡るいろんな状況

コーヒー製品の表示相談で多いのはドリップバッグ製品の表示についてである。中堅クラスは当然であるが、自家焙煎店もドリップバッグの委託製造販売に取り組み、製品表示に工夫を凝らしたいようである。一括表示は食品表示法や計量法に従うほかないが、消費者をキャッチするため景表法上危ないと思われる表現を求める方もいる。ダメなものはダメなのでその旨お応えしている。レギュラーコーヒーの半分程度はドリップバッグに移行しているのかもしれない。確かに利便性は高いし、インスタントコーヒーにはない美味しさがある。

欧米ではコーヒーマシン利用のカプセルコーヒーが主体であるようだが、住宅狭小な日本ではリビングや台所にコーヒーマシンの居場所は余りないと感ずる。CFT子宅にも２～３日鎮座したことがあるが、息子に渡り、すぐまた誰かに渡ったようである。かなり前だが、某社のコーヒーマシン用のカプセルを韓国から輸入する時の表示相談もあった。EU でカプセル製造の紛争があり、誰が製造販売をしても良いとなり、韓国から輸入となったようだ。コーヒーマシンはホテルで時々お目にかかるが、どういうわけかコーヒーマシンの隣にドリップバッグがあり、CFT子はドリップバッグを楽しませていただくことが多い。

日本のドリップバッグ事業者は日本人の鋭い味覚を考え、かつ住宅事情も考慮して製品提供をしているのであろう。日本人は古くから昆布、鰹節、干ししいたけなどからうま味を取出して利用していた歴史がある。このような食事を楽しんできた日本人はコーヒーにも様々味わいがあることを知っているからドリップバッグコーヒーを好むのでないかと思っている。アラン・デュカスさ

んのような複数の三ツ星レストランを持つ料理人も昆布などの日本の伝統的な出汁を利用しているといわれる。

ところで、本年も暑い（熱い）。CFT 子は出勤時にほぼ 100％コンビニに立ち寄るが、35 度超えの暑さのためと思うがアイスコーヒーカップを手に持つ客が驚くほど目立つ。暑いときはブラックアイスコーヒーがうまい。

スーパーのリキッドコーヒーも売れているのだと思うが、個人的にはカフェやコンビニのアイスコーヒーが好みである。一番の違いは怒られるかもしれないが香料臭の有無である。嗜好品であるので香料使用の製品を好きな方がいて当然であるが。

CFT 子の若いころ、喫茶店でアイスコーヒーを注文するとき「レイコー」という人が多かった。「冷たいコーヒー」の短縮版である。当時の昼飯後の喫茶店は涼しさを求める男で一杯であった。女性もいたが今と異なり圧倒的に男世界であったように思う。

とにかくアイスコーヒーを飲みながらこの暑さ超えよう。

（８月１３日記）